Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

# 八木重吉『鞠とぶりきの独楽』詩群とタゴール（資料紹介）

山形，梢

(Citation)
國文論叢別冊,1:66-73

(Issue Date)
2023-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100483217

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483217

■資料紹介

# 八木重吉『鞠とぶりきの独楽』詩群とタゴール

山形　梢

## はじめに

八木重吉は一九二四年（大正一三）六月一八日に『鞠とぶりきの独楽』（『定本八木重吉詩集』彌生書房、一九五八）と題する詩群を作った。田中清光氏が「重吉の詩に、新しい展開が現れる」[1]と評しているように、この詩群は、後日刊行される詩集『秋の瞳』には収録されていないにもかかわらず、重吉の作詩のターニングポイントであるといわれている。ところが、山本洋三氏が「このリズムを重吉は一体どこから、どのようにして手に入れたのか」[2]と述べているように、重吉研究家・愛好者のなかでもこの詩群が生まれた背景は不明とされてきた。

詩群の冒頭には「憶え書」が置かれている。ここには「皆　今夜（六月十八日夜）の作なり。これ等は童謡ではない。むねふるへる日の全てをもてうたへる大人の詩である」と書かれている。五七編もの詩を一晩で一気に書き上げたという重吉に、このとき何が起きていたのか。本稿では、作詩の背景となる「むねふるへる日」の出来事と、それが作品にもたらした影響について、関連資料を紹介しながら明らかにする。

## 1　タゴール講演会と『鞠とぶりきの独楽』

当時の『神戸新聞』と『神戸又新日報』を調べると、一九二四年六月一八日は、インド詩人ラビンドラナート・タゴール（一八六一―一九四一）による講演会が神戸で開催された日であったことがわかる。『神戸又新日報』[3]によると、この日の午後三時から五時まで、兵庫県教育会の主催で、旧制県立神戸高等女学校講堂でタゴールの講演会が行われていた。重吉の年譜には、当時二六歳だった彼が大正一三年六月に神戸でタゴールの講演を聞いたことが記載されているが[4]、詳細な日付はこれまで明らかにされてこなかった。また、タゴールの講演日と『鞠とぶりきの独楽』の作られた日が同日であるという点についても、これまで指摘されていない。

重吉はこの日、勤務先である兵庫県立御影師範学校（阪神御影駅）から神戸高等女学校講堂（現在の兵庫県庁の場所）へ行き、タゴールの講演を聞いた。二時間に及んだ講演内容は、『神戸新

聞』に二日間（六月一九日・二〇日）にわたり紹介されている。[5]以下、その一部を引用する。

子供には目的と云ふものがないさうして大人にはこれがある故に大人は何でも自己の目的に關係あるもの、のみを注意し自らの世界を極限して進むこれに反して子供はすべてを同一に視る眼前に展開する全べての物を視、聞き、そうして味うて敢て選擢をしない渓川の流が小石に弾かれて早さを増す如く子供は新しき事實に遭うて驚く毎に新しき知識を得る大人であり目的を有する學校管理者は大人の目的に適する鑄型に子供を入れこれに反するものは悉くこれに除外する而して彼等はこれを教育と稱した彼等は自然から美しき色や活動やすべてのものを取去つて牢獄を造つて學校と呼んだ、さうしてこれを子供に利益があるとして訓練と稱へ修養と名づけた

タゴールはこの講演で、子どものもつ無垢な心を礼賛するとともに、大人や学校教育がそれを歪めてしまうと指摘し、大人や教師に向けて戒めの言葉を繰り返したようである。また、九月一九日の『神戸又新日報』には次の記事が写真（図1）とあわせて掲載されている。[3]

縣立高女大講堂に於けるタゴール翁の講演會は立錐の餘地無き大盛況で午後三時古川學務課長の挨拶に次ぎ小川高商教授の通譯で夕翁は拍手に迎へられて壇上に立ち自ら詩を誦するが如く銀鈴を轉ずるにも譬ふべき美音で流暢な英語を以つて（中略）、其森林哲學に立脚し諄々として自然的教育を讃へ教育者達に多大の感動を與へ午後五時頃散會した、在神印度紳士等も熱心に傾聽して居た

**【図1】タゴールの講演会の様子**
（「タ詩聖歸神―出迎少女の頬を指頭でつく無邪気さ」『神戸又新日報』1924年6月19日より）

これらの記事は、兵庫県教育会の主催による本講演会が、子ども（特に、小さな子ども）の教育に関する内容のものであったことを報じている。タゴールは、子どもが生まれながらにもつ心を尊重し、自由を与えて自然のままに育てる教育を推奨している。一方で、子どもの自由を奪うものとして、学校教育の現状を痛烈に批判している。

そのころ日本でも大正新教育運動が起きており、各地で講演会や研究会がさかんに行われていた。[6]新教育運動とは「それまでの〈臣民教育〉が特徴とした画一主義的な注入教授、権力的なとりし

まり主義を特徴とする訓練に対して、子どもの自発性・個性を尊重しようとした自由主義的な教育であり、そうした立場からの教育改造が一つの運動として展開された」もので大正自由教育とも呼ばれる。[7] タゴールの語る自然的教育の考え方は、こうした新教育運動に関心・期待を寄せる教師らを中心に受け入れられたと考えられる。

本講演は「立錐の余地無き大盛況」の会場で多くの参加者に「多大の感動を與へ」たという。それでは、その会場にいた重吉はどのような影響を受けたのだろうか。

## 2　タゴールからの影響

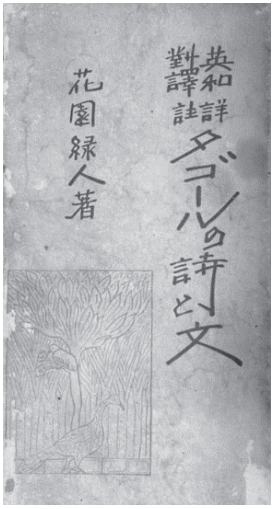
重吉がタゴールから受けた影響は、九年前の一九一五年（重吉一七歳）にさかのぼる。この年、花園緑人著『タゴールの詩と文——英和対訳詳註』[8]が刊行された（図2）。本書にはタゴールの *The Crescent Moon*、*The Gitanjali*、*Sadhana* から選出された詩文が英和対訳で収載されている。

重吉は鎌倉の神奈川県師範学校（現・横浜国立大学）に在学し英語を熱心に学んでおり、当時つけていた英文日記には本書を書店に注文したことが記されている。[9] 重吉が詩と信仰の道へ進み始めるターニングポイントとなる時期に愛読していたのが本書である。「タゴールは深い宗教的感情に満ちた詩人であり、その感化を受けたことはまちがいないだろう」[10]との指摘がある。

そうはいっても、一九二二年以降本格的に詩を作り始めた重吉は、タゴールを作詩の師としていたわけではなかった。国内外のさまざまな詩を読み、一九二二年から三年ほどはキーツをとりわけ熱心に読んでいた。講演会直前の一九二四年四月から五月にかけては《The Collections of Essays on John Keats》と題するノオトを作成するなど、キーツ研究に没頭していた。当時のノオトに残された詩集購入予定のリストにもタゴールの名はみられない。[4]

タゴールの神戸来訪は、重吉にとって、かつて感化を受けた詩人を再認識する機会となった。二六歳の重吉は、①詩人、②父親（一歳の娘・桃子）、③教育者（英語教師）、という三点でタゴールとの共通項が生まれており、九年前とはまた別の、より深い新しい関心を持って講演に向き合ったとみられる。重吉の夫人である吉野登美子氏は、重吉が講演後に帰宅し「清らかな声のひとだった」と言っていたと回想しているが、[11]「銀鈴」の肉声を聞いた感動も格別だっただろう。

『鞠とぶりきの独楽』の冒頭「憶え書」にある、六月一八日の




【図2】花園緑人『タゴールの詩と文——英和対訳詳註』表紙（ジャパンタイムス学生号出版所、1915年）

「むねふるへる」できごととは、タゴールの講演会のことを指している。「むねふるへる」の言葉に表れているのは、講演会後の高揚感であると考えられる。この体験は重吉にとって、新しい詩法を得たと後に評されることとなった、二度目のターニングポイントとなるのである。

## 3 『鞠とぶりきの独楽』にみるタゴールの影響

講演会の同日夜に一気に書きあげられた『鞠とぶりきの独楽』（図3）[4] 五七編のうち、四二編は子どもや玩具（鞠と独楽）をモティーフとした詩である。これらの重吉の詩と、タゴールの講演会の言葉、および *The Crescent Moon* とを比較してみよう。本書は、タゴールが次女の肺結核の転地療養と死去の時期に作詩したベンガル語詩集『おさなご』を後年英訳したものであり、子どもにまつわる詩が中心である。

『鞠とぶりきの独楽』は子どもの「ありのまま」を愛おしむ父親の目線から作られている。*The Crescent Moon* も同様に、父親の目線に依る点で共通している。いずれも愛情深く子どもを観察し、さらには子どもの目線になりきって世界を観察している。講演会で繰り返し述べられた、大人が子どもへ歩み寄る意識が基本スタンスとして徹底されていることは、次の詩篇から明らかである（全五七編の掲載順に番号を付す）。

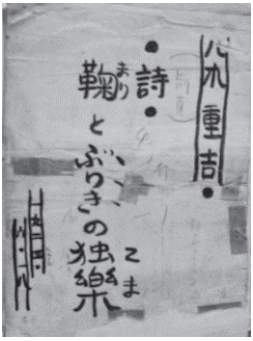
てくてくと／こどものほうへもどってゆこう　（三）

こどもがよくて／おとなが　わるいことは／まりをつけばよくわかる　（六）

また、『鞠とぶりきの独楽』のなかには、*The Crescent Moon* から着想を得たことを窺わせる作品もある。次に引用する一九作目の詩篇は、*The Crescent Moon* のうちの一作 WHEN AND WHY を模したものであるといえよう。

色はなぜあるんだらうか／むかし／神さまは／にこにこしながら色をおぬりなされた／児どもが／おもちやの色をみるようなきもちで　（一九）

When I bring you coloured toys, my child, I understand why there/ is such a play of colours on clouds, on water, and why flowers are/ painted in tints-when I give coloured toys to you, my child.（WHEN AND WHY）




【図3】『鞠とぶりきの独楽』表紙（田中清光編『八木重吉文学アルバム』筑摩書房、1984年、36頁より）

私がおまへに彩つた玩具を持って來てやる時に、私の子供よ、私は何故雲の上に、水の上にいろいろの色がちらつくかを了解する。そして何故花がいろ々々の色で彩られるかを了解する――私がおまへに彩った玩具を與へる時に。私の子供よ。（「WhenとWhy」花園緑人訳）

さらに、タゴールの同詩集には「玩具」PLAYTHINGSという詩が続く。小枝や土で遊ぶわが子を観察する父親の詩である。

Child, how happy you are sitting in the dust, playing with a broken twig all the morning./I smile at your play with that little bit of a broken twig./I am busy with my accounts, adding up figures by the hour./Perhaps you glance at me and think, "What a stupid game to spoil your morning with!"/Child, I have forgotten the art of being absorbed in sticks and mud-pies./I seek out costly playthings, and gather lumps of gold and silver./With whatever you find you create your glad games, I spend both my time and my strength over things I never can obtain./In my frail canoe I struggle to cross the sea of desire, and forget that I too am playing a game.（*PLAYTHINGS*）

子供よ、折れた小枝で朝の中を遊びながら、如何に幸福にお前は埃の中に坐つてゐるよ。私は折れた小枝のその小片でお前の遊ぶのを見て微笑する。私は一時間一時間で数字をよせながら私の勘定で忙しい。おそらくお前は私をちらと見てかう考へるであらう。「そんなことでお前の朝を無茶苦茶にして了ふとは何たる馬鹿々々しい遊戯ぞや」

子供よ、私は棒切れや土團子で遊びに耽る術をすつかり忘れて了つた。私は高價な玩具をさがし出す。そして金や銀の塊を集める。おまへは何でも見出し得らるゝものでお前の喜ばしい遊戯を創造する。私は私が求め得ない物の爲に、私の時間と力とを費やす。やにつこい丸木舟（canoe）に乘つて、私は慾望の海を超へやうと奮闘してゐる。そして私も亦遊戯をやつてゐることを忘れてゐる。（「玩具」花園緑人訳）

重吉もまた、玩具（鞠と独楽）についての詩を続けている。そこでは、*The Crescent Moon* から着想を得たのであろう玩具というモティーフに、重吉が変化を加えているさまを見ることができる。八・九作目は、玩具に自分の心を投影している。

ぽくぽく　ひとりでついてゐた／わたしの　まりを／ひょいと／あなたになげたくなるように／ひょいと／あなたがかへしてくれるように／そんなふうに　なんでもいったらなあ（八）

ぽくぽく／ぽくぽく／まりをついてると／にがい　にがい　いままでのことが／ぽくぽく／ぽくぽく／むすびめが　ほぐされて／花がさいたようにみえてくる　（九）

「ぽくぽく」と繰り返すうちに連想は広がり、まりは、八作目では他者との関係をつなぐものとして、九作目では自身の苦しみを

浄化するものとして、役割を変えて登場している。

一六作目は「いいやあぽん」という桃子の発語を観察し、子どもの「ありのまま」のよさを伝えている。さらに一八作目からは桃子の内なる言葉に入り込んでいる。

も子は／まりのことを／「いいやあぽん」といふ／なんだか／ほんものの鞠より／もっと鞠らしい　（一六）

まわるものは／みんな　いいのかな／こまも　まわるし／まりも　まわるし　（一八）

二六・二九・三三作目には先ほどの「玩具の色」のテーマが再来する。まるで「児どもがおもちゃの色をみるようなきもち」で玩具を見て、その色や形や動きに初めて気がついたような観察眼である。

まり／／まわりが　赤だ／まんなかが　青だ／あひだに／白いすぢがいっぽんついてる／まあり　まあり　すると／なにがなんだか　わからなくなる　（二六）

こま／／ぶりきの　独楽を　ひっくりかへすと／黄いろくぬってある／ほんに／腹　と　いふ気がする　（二九）

こま／／赤い　いろは／なんのためにあるんだか　わからなかった／それが　けふわかった／おもちやの　独楽をぬるためだよ／やっとわかった　（三三）

重吉はこうして、タゴールが講演で指摘した「何でも自己の目的に関係あるもののみを注視」する大人の見方をやめ、子どものように「眼前に展開する全べての物を視」、「新しき事實に遭うて驚く毎に新しき知識を得る」ことを実践している。しかし、つい先日までキーツ研究に没頭するなど、作詩の勉強を積み重ねてきた重吉にすれば、玩具のモティーフによって詩がどんどんできあがることにいささか拍子抜けした様子も垣間みられる。その感覚を伝えるのが、三七作目である。

おもちやを　うたへば／かずかぎりなく／うたが　うまれる、／うれしいやら／ありがたいやら、／すこしかなしい　（三七）

## 4　師範学校の生徒との関係性

ここまで父親としての重吉に焦点を当てて検証してきたが、「教師」という側面に講演会の影響がどのようにみられるかについても触れておきたい。

重吉は、神奈川県師範学校と東京高等師範学校を卒業後すぐ、大正十年四月より兵庫県立御影師範学校教諭兼訓導（英語科）として勤務した。教師生活への失望が数多く書き残されており、大正十年九月の日記には次のような言葉が記されている。「なにごともにやにやわらひ用のすむ　教員といふは人のくずかや」。「偽善者の八木めが今日もさかしらに　教壇に立ちて世迷ひをとく」。こ

こに吐露されているのは、生徒や同僚への嫌悪と、そのなかで働く自己への嫌悪である。詩集『草は静けさ』（大正一二年）より、次の無題詩（『八木重吉全集　第三巻』前掲）を引用しよう。

ひどく寒い日だ。／おお、今日も、醜い顔、／胸くそのわるくなる顔！／いやだ、いやだ。／何だ、その、いやに赤黒い皮膚、／汚らしい眼！／眠ってゐるよりもいやな眼！／低脳の群れよ！／豚の群れよ！／何だ、その瞳は⁉　いったい／「夢」なんて、あるのかえ⁉（以下略）

この詩に典型的であるように、重吉はとりわけ生徒に関しては「豚」と呼ぶなど辛辣であった。当時の生徒である藤原正司氏の証言によると、御影師範学校での勤務中に「答案白紙事件」という試験ボイコット行為を重吉は複数回受けている。重吉の教える英語科目は、生徒らが卒業後に就職する小学校の必修科目ではなかったため、積極的に学ぼうという生徒は少なかったという[13]。ところが、タゴールの講演会後（一九二四年十月）に作られた欠題詩群〈一〉にある無題詩（『八木重吉全集　第一巻』前掲）では心境の変化がみられる。

豚のような生徒といふものども、／なんといふ　いやらしいかほつきだ、／いやに利にさとい、／猫のような、げすばったやつら、／だがまてよ、／師範学校といふくだらぬ制度、／こいつがわるいぞ、／だれがつくりやあがったのだ、／だが、俺れといふ人間、／この学校のゆえにめしをくふ人間、／ふがいないやつだ、／豚のかしらか、ねこのかしらか、／なさけない世だ、（以下略）

生徒を「豚」にたとえながらも、批判の矛先は、生徒から「師範学校といふくだらぬ制度」へ、さらには「豚のかしら」にたとえた自己へと移っている。大正期の師範学校は教育が形骸化して「権力に従順な教師」を養成しているという実態であったことが、上田誠二氏の論考で指摘されている[14]。師範学校の教育はタゴールの批判する「鋳型教育」にほかならず、そこで育成された若者が教師となりまた子どもへの「鋳型教育」の実践者となっていく。そこにみずからが加担していることの懊悩が動機となって、子どもや自然をうたう作詩へと向かったとも想像できるのである。

## おわりに

八木重吉『鞠とぶりきの独楽』詩群の制作背景については、これまで明らかにされてこなかった。本稿の考証によれば、この詩篇が一気に書き上げられた背景には、同日に行われたタゴールの講演会が詩人に与えた高揚感があった。それまでの重吉はキーツ研究に取り組みながら作詩をすすめてきたが、これらの詩篇を機に作風が変わったと評されるのも頷ける。後に出版される『秋の瞳』には収載されなかった理由としては、高揚感の勢いで書かれた作品の習作のような性格を、重吉自身が自覚していたことが挙げられるだろう。

『鞠とぶりきの独楽』に一貫する、子どものありのままを愛おしむ父親というスタンスには、タゴールの講演内容への共感が表れ

ている。玩具と色のモティーフの連作はタゴールの詩集 *The Crescent Moon* から着想を得たものと考えられる。

重吉が家に帰ると、一歳の桃子が目の前にいるという現実があった。この時期、夫人は新しい命（陽二）を宿しており、重吉は桃子の世話に積極的だったことが書き残されている。[11] 桃子にてくてくと近づき、鞠や独楽であやす父親の日常風景が、詩の言葉をもたらしている。桃子と妻を寝かせた後、原稿用紙を片手に鞠と独楽を動かし、桃子に心を寄せ、また、子どもの心に近づいてみようと取り組む重吉の姿が想像される。

重吉が講演を機にタゴールの *The Crescent Moon* を実際に読み直したかどうかは定かではない。重吉自身によるタゴールに関する著述は見つかっておらず、今後、記録や蔵書など新たな資料の公開・発見が期待される。

## 注

（1）草野心平他編『八木重吉全集　第一巻』（筑摩書房、一九八二年、一八一－一九五、二〇三、四一三頁）

（2）山本洋三「評釈『鞠とぶりきの独楽』」（『論攷玉縄』栄光学園、一九八八年／「八木重吉ノート」〔URL〕http://www.venus.dti.ne.jp/~yoz/hyouron/yagi.con.html）

（3）「夕詩聖歸神――出迎少女の頬を指頭でつく無邪気さ」（『神戸又新日報』一九二四年六月一九日）

（4）田中清光編『八木重吉文学アルバム』（筑摩書房、一九八四年、三一・三六・一八二頁）

（5）「小さき者の解放――鋳型教育を強制する学校の制度は子供の牢獄（上・下）」（『神戸新聞』一九二四年六月一九日、二〇日）

（6）海原徹『大正教員史の研究』（ミネルヴァ書房、一九七七年、一三三－一四三頁）

（7）中野光『大正自由教育の研究』（黎明書房、一九六八年、一〇頁）

（8）花園緑人『タゴールの詩と文――英和対訳詳註』（ジャパンタイムス学生号出版所、一九一五年、一－五〇頁）

（9）八木重吉／佐藤ひろ子監修／小林正継訳『八木重吉英文日記――垣間見る八木重吉の詩心』（いのちのことば社、二〇二〇年、一三四頁）

（10）八木重吉の詩を愛好する会「八木重吉の生涯」（「こころの詩人八木重吉の魅力」〔URL〕http://yagijuaiko.com）

（11）吉野登美子『琴はしずかに――八木重吉の妻として』（彌生書房、一九七六年、八〇－八四頁）

（12）草野心平他編『八木重吉全集　第三巻』（筑摩書房、一九八二年、一三六－一三七・一七二－一七三頁）

（13）藤原正司「ツウインクル、ツウインクル、リッツルスター　八木重吉先生のこと　御影時代の重吉の思い出（四）」（『いっぽんのみち 八木重吉の詩を愛好する会会報』二九号、一九八九年）

（14）上田誠二「大正デモクラシーに挑んだ師範学校教師・八木重吉という詩人の遺産――北原白秋との比較を通してみる貧困化する社会での人間性の発露」（『横浜国立大学教育学会研究論集』五、二〇一八年）

（やまがた　こずえ／神戸大学文学部卒）